
Grim Reaper - prison

あと

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Grim Reaper - prison

【Nコード】

N2125V

【作者名】

あると

【あらすじ】

生という監獄に囚われている彼は、死をもたらす死神を求めた。死神は、生と死の狭間を彷徨い、耳をそばだてた。

第一話（前書き）

一部で生々しい表現があり、不快に思われるおそれがあります。
四話構成となります。

第一話

薄いカーテンを通して、木々の碧が透けていた。蝉時雨が自己主張を繰り返して、窓を通して室内に染みこんでくる。ほどよく冷やされた空気がゆっくりと漂っていた。

彼は、ただ、そこにいた。

窓際の寝台に横たわり、慎ましかに目を閉じていた。白い頬と白い腕が、白いシーツに溶け込み、境界が曖昧になっている。

「入りますよ」

軽いノックの後に、看護師の女性が顔を見せた。さらりとしたショートヘアに、明るい色合いが加わっていた。彼女の華やかさが病室を明るくさせた。

早見渚は患者の返事を待たず、寝台を覆うカーテンを開けた。ナーズウェアのポケットから体温計を出した。

「あら」

眠った青年の口元が少し汚れていた。唾液が乾いた痕のようだった。彼女はハンカチで拭おうと考えたが、思い直してかがみ込んだ。前髪が青年の頬に触れ、舌先が唇を撫でた。

（何するんだよ）

「起きてたの？」

汚れを舐め取った後、彼の無精髭を逆撫でた。じりじりと音がする。

（起きているさ。さっき、まずい昼飯を食わされた）

流動食が彼のいつもの食事だ。口元の汚れは、拭き残しだろう。

「我慢しなさい。噛めないんだから、仕方がないじゃない」

（肉が食いたいな）

目を閉じたままの青年は、唇も閉じたままだった。耳に届くはずの声は、空気を震わせない。

「贅沢言わないの」

(いてつ。叩 なよ。暴力反対)

渚は彼の腕を叩いた。一瞬だけ、声が途切れた。

彼女は、肌を通して人の言葉が聞こえた。喋ることのできない人とも会話ができ、意識がないとされている、青年のような患者とも、意思の疎通が図れる。そのことは、二人だけの秘密だった。

(とうか、舐めるなよ)

「舐めたんじゃないくて、あれはキス」

(キス……だと?)

ほんのりと赤くなった顔を見て、彼女は小さく笑った。

「暁、顔が赤いわね。熱があるのかしら」

体温計を口に差し込んだ。

「そろそろ、髭剃ろつか。シートも替えないとね」

(お前は何を考えて……)

ぶつぶつ言つ心の声が聞こえた。

「照れないでいいのに。お姉さんがもつといいこと、してあげようか?」

渚の手が腰の付近に伸びた。

(お姉さんとか言っな。いくつも変わらないだろ。触るなって)

「いいじゃない。減るもんじゃないし」

(オッサンか!)

渚は体温計の目盛りを記録した。

「身体は健康ね」

脈を取り終え、異常がないことを確認した。さり気なく、下腹部に手を伸ばす。

(おい、いい加減にしろよ。動けるようになったら襲っちまうぞ)

「楽しみにして……いいのかな?」

ぴくりとも動かない青年に、渚は肩を落とした。彼が動けるようになるのなら、看護師として、非常に喜ばしいことだった。ただ、その見込みがどれくらいあるのか、わからなかった。

「じゃあ、またね」

渚は明るい声で病室を後にした。曇った顔が見られないですむのだけ、ほっとする。

「こら、走り回らないの」

渚の脇を子供が駆けていった。

「言っても聞きやしないよ。身体に教えないと」

三十路を過ぎた先輩看護師が、子供の行く手を遮って尻を叩いた。

「やりすぎじゃないんですか？」

「あんた、この子らを相手にするの初めてでしょう？　一緒にいてやれない親の代わりに、私たちが躰の手助けをするってこと。

ほら、前を見る！」

子供がリネンのかごにぶつかりそうになった。あわやというところで、急停止して衝突が避けられた。

「まったく、ここは保育所じゃないんだけど」

溜め息を吐きながらも、彼女の顔は笑っていた。子供が好きなのだろう。

「子供って、元気いいですね。あら、どうしたの？」

クマのぬいぐるみを抱えた女の子が、壁にもたれかかっていた。スリッパの先を真っ直ぐに見ていた。渚が話しかけても、顔を上げない。

「その子、ちょっと自閉気味だね」

渚は腰を屈めた。

「ね、みんなと遊ばないの？」

女の子は顔を背けた。スリッパが横を向いた。

「待って」

手を握ったら、振り払われた。

「マーくんは遊びたいみたいだよ」

女の子が振り向いた。丸い目が潤んでいた。

「クマのマーくんは、陽子ちゃんがみんなと仲良しになって欲しいって」

「……本当？」

女の子は腕の中のぬいぐるみに話しかけた。

「ミンナト、アソボウヨ！」

渚は甲高い声を出した。

「マーくんは、そんな声しないもん。もっと格好良くて優しいの」

「ごめんごめん」

女の子の考えは、意外にしつかりしていた。

「お姉ちゃん、何で知っているの？ あたしとか、マーくんのこと」

「なんでかな。わかっちゃったのよ」

（変なの）

心の声が手を通して聞こえた。

「変だよね」

小さな手を握って笑った。

女の子もつられたように笑っていた。

「新しい先生が来るっていうから、期待してたんだけどさ。あれは、ハズレね」

ナースステーションに挨拶に来た医師が、廊下の先に見えなくなつてからの第一声だった。

「結構、優秀って噂だけど」

看護師の一人がペンで頭を叩いた。

「馬鹿ね、見た目の話。三十代前半であのお腹はない。ぽよよんって感じでしょ」

「そっちか」

看護師仲間の話に、渚は笑い声を上げた。

彼女たちが言うように、紹介された医師は、胴回りも太く、顔もぽつちやりしていた。だが、優しいな目は、患者からの受けは良さそうに見える。

「渚はどうなのよ？」

「ないない」

即答した。

「そりやそうよ。渚は、一条くんにぞつこんだものね」

「一条くん……寝たきりの彼よね？」

「眠れる部屋の王子」

同僚の含み笑いに、渚は言葉を失う。

「看護助手の仕事を取っちゃうくらい、べつたりなもの」

「取ってない！」

髭を剃ったり、身体を拭いただけだ。今週と、先週と、先々週と。思い出せば、ずっと面倒をみていることに気づく。

「楽できるって、おばちゃん、言ってたけどね」

看護を少し控えたほうがいいのかもれない。だが、彼の家族は、ほとんど見舞いに来ない。渚が自粛したら、彼は一人で寂しい思いをする。彼と会話ができるのは、渚だけなのだから。

「まあ、いいんじゃないの。渚も、好きでやっているんだからさ」
好き、というところを強調した同僚が、にやにや笑っていた。

「好きなら、ねえ」

引っかかりを感じる物言いだ。

渚は黙って聞き流した。突っかかったら、もっと冷やかされそうだ。冷やかされても、本当は悪い気はしなかった。だが、同僚以外の誰かに聞かれたら困る。病院の人間と、患者の恋愛は、禁じられていた。

渚と暁は、寝台の上で身体を密着させていた。うつすらとかいた汗の匂いが、鼻をくすぐった。

（重くないか？）

「大丈夫」

寝返りを打たせ、身体的位置をずらした。床ずれが起きないようにするためだ。自分で動けない患者を動かすのは、重労働だった。若く力のある者ならともかく、看護助手のおばちゃんでは一苦労だろう。

「お邪魔するよ」

「太田先生？」

ぼつちやりとした腹が入ってきた。そう思ったのは一瞬だけで、渚は着任したばかりの医師に頭を下げた。

「彼が一条くんだね」

寝台に記載された名前を確認し、患者の顔色を窺った。

「一年、植物状態のままか」

「先生！」

渚が声を荒げた。

「どうしたんだい？」

「そういう言葉は、控えていただけませんか。患者さんの耳に入りますので」

渚は、太田を睨み付けた。背筋を伸ばすと、二人とも同じくらいの背丈だった。体重は倍くらい違うが、威圧感はどうこいどっこいだ。

「聞こえるわけないだろう」

「聞こえてます」

「ずいぶん、はっきり言うね。彼の考えていることがわかるみたいだ」

目を細めて笑われた。憎めない笑顔も、渚には嫌みに感じた。

「まあ、聞こえても関係ないよ。彼は、二度と目覚めないからね」

「やめてください！」

太田の頬が音を立てた。

「な、何をするんだ」

あまりに無神経な科白に腹が立った。渚はつい手を出してしまった。

「あ、ええと、ごめんなさい、蚊がいましたので」

「蚊なんて、いないだろう！」

「今、刺そうとしていたんですよ。気づきませんでした？」

白々しい言い訳に、太田は鼻を鳴らした。

「これは問題だ。覚えておくぞ」

「忘れる！」

閉じたドアに暴言をぶつける。深呼吸をした。怒りを抑え、冷静になるように努めた。暁に向き直ったときは、平常心を取り戻していた。

「脈、計るね」

（なあ……）

手首に触れると、暁の声が聞こえた。

（俺、やっぱりダメなのかな）

渚の心拍数が上がった。脈拍を数え間違えた。

「そんなことない」

きつと目覚める。

そう言いたくても、口にはできなかつた。医師の知識、経験は、看護師の比ではない。太田が何を根拠に、目覚めないと言ったのかはわからない。

叩いた時に触れたのは一瞬で、太田の思考を読み取るまではいかなかった。

（お前が言ってもな）

医師という肩書きは、患者の不安を煽るのに十分だった。暁は、太田の一言を信じ始めていた。

（死んだほうが、楽なのかもな）

「馬鹿」

暁の頬に触れた。剃ったばかり肌は、綺麗な白だった。

「そんなこと言わないでよ。私の、私たちのやってきたことは何なのよ」

（そうだけどさ。真っ暗闇って、結構きついんだぜ）

ことさら明るい調子だったが、伝わってきた声は震えていた。

目が見えない、話もできない。自分の身体という監獄に押し込められて、日々を送る辛さは、当人しか知らない。渚がいくら想像しても、体感はできない。

（お前がいなかったら、もたなかつたかもな）

ただ、意思の疎通ができる相手がいた。渚と話することによって、暗

闇に一条の光が差し込んだ。彼女は、本当の看護師だった。暁にと

って、身体と心のケアができる唯一の存在だ。

「ずっと一緒にいてあげるから、諦めないで」

（ありがとう……）

力ない返事に、渚は暗い気持ちになった。

「さあ、身体拭こう。脱がすよ」

吹っ切るように、胸元のボタンを外した。

（ちょっと待てよ。俺、まだ心の準備が）

「今更、何言ってるの。暁の身体は、隅々まで見ちゃってんだから、照れないでいいの」

（くそ……）

年の近い女性に見られるだけでなく、至るところを触られてしまう
恥ずかしさは、いつまで経っても慣れない。

彼の男心は、無惨に砕かれていった。

第二話

宿直にあたっていた太田は、救急患者の手術を終えて、コーヒーを口に含んだ。

「お疲れさまです」

「お疲れ」

交通事故の被害者は、粉碎骨折だった。命に別状はなく、手術の難易度もそう高くはなかった。外科手術は専門外だったが、苦手ではなかった。

窓の外が白み始めていた。この時間になると、もう急患が運び込まれることもないだろう。

太田は、コーヒードで冴えた目を揉みしだき、手術の興奮を抑えようと努めた。だが、ひとたび目覚めてしまった意識は、なかなか安まらなかった。

「ふむ」

空になったカップをゴミ箱に入れ、太田は鼻を鳴らした。口元に笑みが浮かんだ。そこに優しさの欠けらはなかった。

太田はナースステーションに顔を出した。

「やあ、変わりないかい？」

「はい、先生」

「今日はもう静かですね」

彼は看護師たちに紅茶を差し入れた。

「わあ、ありがとうございます」

「まあ、肩の力を抜いてやってよ。じゃあね」

身体をゆすりながら去る医師に、看護師二人は和やかさを感じていた。

「太田先生って、かわいいよね」

「気が利くしね。彼氏は願ひ下げだけど、旦那にするならいいかも」
かぐわしい香りの紅茶に口を付け、二人は小声で笑った。

カップの中身が空になる頃、太田が再びナースステーションを覗き込むと、彼女たちは寝息を立てていた。

「少しだけ、休んでいなさい」

音を立てずに廊下を進み、暗がり突き当たりまで行った。ドアノブをゆっくり回して、部屋に入り込む。広い部屋には、寝台がひとつだけだった。

太田は、目を閉じている青年を前にした。

「こんばんは、一条くん」

鼻が鳴った。荒い吐息が抑えられなくなる。

「身体の向きを変えてあげるよ」

上掛けが剥ぎ取られた。

暁の腰に、太い手が乗った。

「検温するわよ。ん？」

渚は顔をしかめた。

「なんか臭う」

テーブル上のウェットティッシュを取っても、拭くべきところがわからなかった。

「昨日、何かあった？」

（渚）

暁に触れた矢先に、切羽詰まった声が伝わってきた。

「どうしたの」

（頼む、身体を拭いてくれないか）

彼の声が震えていた。身体も、心も震えているようだった。

いつもは嫌がることなのに、今日の彼はおかしかった。

上着を脱がせた。ズボンを下ろし、自力でトイレに行けない患者のためのオムツも外した。

「やだ、夢精してるじゃない」

臭いのもとはこれだった。

（汚いんだ。俺の身体、汚いんだよ。くそっ、気持ち悪い！）

「そんなにあわてなくても」

青年の動揺がおかしかった。若い男性にしてみれば、恥ずかしいことではある。

（違う、俺じゃない！）

「えっ？」

言葉にならない意識が流れ込んできた。不快さが怒りと混ざり合っていた。それらが包んでいる何かに触れた。ひとつの言葉が見つかった。

渚は、その手がかりを頼りに、暁の身体を横に向けた。下半身を後ろから見た。うっすらとした汚れがあった。

「血？」

触診すると、暁の痛みが伝わってきた。

「これって」

突拍子もない考えが、渚の頭に浮かんだ。女性向けの漫画で、同性同士がそのような行為をすると聞いたことはある。だが、そんなことが目の前で起きるはずはない。現実には、病院で、起こり得ると思えない。

理解ができない。混乱が、時間を止めた。

（あの野郎が）

「あの野郎……？」

（俺が二度と目覚めないって言った医者だ）

「太田先生」

（あいつが、来たんだ）

血液の付着と、暁の言葉が、事実を突きつけた。ようやく理解が追いついてきた。

渚は口を押さえた。吐き気がした。

（なんなんだよ。もう嫌だ、嫌だ！）

悲痛な叫びが彼女に打ちつけられた。

「なんで、こんな、俺が」

守られてしかるべき患者が、病院で、病室で、非道なことに遭遇し

た。暁に責められている気がした。
血の気が失われた。冷や汗が出てきた。胃の中のものが、込み上げ
てくる。我慢できずに吐いた。

（こんな目にあうくらいなら、死んだほうがマシだ！）

「そんなこと言わないで！ 言わないでよ……」

反射的に否定したが、彼の気持ちを考えて、力が失われる。

（本当は、目覚める見込みなんてないんだろ。俺は、このまま死ぬ
んだろ）

自暴自棄になっっているのがわかった。渚は何も言えない。言うべき
言葉が見つからない。

（いつそのこと、殺してくれ）

「やめて！」

渚の胸は、ずたずたに切り刻まれた。

患者から死を望まれる。それは、もっとも辛いことだった。看護師
である自分が否定される。医療に携わる人間、病院という施設の存
在が覆される言葉だ。

（もう、死なせてくれ）

渚は歯を食いしばった。強く、彼の手を握った。そうしてないと、
自分が消されてしまいそうだった。

（惨めだな）

しばらくして、彼は呟いた。

渚は首を振った。惨めな思いをしているのは、彼女のほうだった。

（俺なんて、生きている価値がない。ゴミのような存在だ）

「違うよ。暁は、暁で、生きていて欲しい人だから」

渚は鼻を嚙り、彼にすがった。彼を看護している自分に、気づいて
欲しかった。渚は、暁の身体を拭き始めた。いつもより丁寧に、汚
れを削り落とすように拭いた。

（俺は、俺が、いらない）

静かな声だった。固い意思が感じられた。

「自分を嫌わないで。そんなの悲しいよ」

(こんな自分を嫌わないヤツなんかいないだろ！　なんで、男に犯されなきゃならないだよ。動けたら、こんなことにならなかつたんだぞ)

怒りが弾けた。

(お前だつて、レイプされたら死にたくなるはずだ)

「そうかもしれないけど」

渚は唇を噛みしめた。血の味がする。必死に、感情的になった声を抑えた。

「そうかもしれないけど、死ぬってというのは、そんなに簡単に決められない」

人の死は、数多く見てきた。ちよつとしたことで、たやすく失われってしまう命、苦しんだ末に潰える命にも触れてきた。

命の重さは、決して軽くはない。

病気や怪我で失われる命を救おうと、日々、多くの人たちが力を尽くしていた。渚はその一員だ。だから、自殺を否定したい。

(死のうと思えば、いつでも死ぬるヤツはいいさ。俺は、死にたくても、自分で死ぬないんだぞ)

手のひらに短く切りそろえた爪が食い込んだ。

暁の言うことは、正論だつた。

死にたいと思つたら、彼女は首を吊れる。薬を飲むこともできる。だが、彼は手首を切ることも、飛び降りることもできないのだ。

自由がない。生きる自由も、死ぬ自由もない。誰もが持っているものを、彼だけは取り上げられていた。

「暁」

渚は彼を呼んだ。彼は黙っていた。心が背を向けていた。

「死ぬのは、悲しい。どうしようもなく、悲しいことだと思う」
心の背中を撫でる。

「小さな子供も、長生きしたお爺さんも、みんな同じ命を持っている。私も、暁も、同じ命を持っている。健康な人も、患者の人も、同じなのよ」

(あたりまえだろ)

「でも、みんな生きようとして、病院にいる。暁も、ここにいますよ」

(俺が、いつ、生きたいなんて言った。誰も俺の言うことなんて、聞いてないじゃないか。聞かないじゃないかよ！)

「そう。そうよね。聞かなかったよね。ごめん」

(いや、お前のせいじゃない。悪い)

暁の背中が隠れた。

「ねえ……本当に、死にたい？」

渚は汚れたものを床に置き、上掛けで彼の身体を包んだ。彼女の手が、暁の手を包んだ。身体を通して聞こえる声を、ひとつも漏らさないようにする。

「よく考えて。どうしても死にたい？」

暁の心が何よりも大事だった。彼のように物言わぬ患者は、ないがしろにされやすい。誰かが気にかけていないと、いることさえ忘れられてしまう。そんなことをさせてはならない。

(ああ、終わりにしたい。もう、死んでしまいたい)

自分の言葉を確かめるように、ゆっくりと暁は肯定した。

「わかったわ。何日かして、それでも気持ちが変わらなかつたら」

渚は口を引き結んだ。心から込み上がってくる悲しみを抑えた。自分を殺して、抑え込んだ。

「殺してあげるね」

暁の決心は変わらなかつた。ずっと続いてきた暗闇から、抜け出せる可能性が巡ってきたことで、期待が膨らんでさえた。

死ぬのは、正直怖い。だが、長い監獄生活を終わらせることができるのは、甘い誘惑だ。

(だけど)

渚は、殺してあげると言った。それは、彼女が殺人犯になるということではないのか。それを思うと、心が重たく濁ってくる。

(自分勝手だな)

今まで、親身になって看護してくれた彼女が、犯罪者になってしまふのは避けたい。だが、殺して欲しい。身勝手なわがままだった。ノックがして、ドアが開いた。

(渚?)

ゴミ箱を動かす音がした。彼女ではなかった。掃除をするのは、看護助手のおばさんだった。

カーテンが開き、少しだけ陽射しが入ってきた。

「おや」

おばさんが寝台の脇に立った。

「昨日と同じままかい。渚ちゃん、どうしたんだらうね」

病室の片隅の収納棚に、一輪挿しが飾られていた。花弁が寂しく垂れていた。

(花?)

そんなものがあるなんて知らなかった。おばさんの口調だと、毎日変えていたようだ。

「眠り王子には、目の保養にもならないのね」

勝手につけられたあだ名は嫌いだった。好きで寝ているわけではない。他人の気持ちを考えない遊びに、ずっと嫌な気持ちを持っていった。渚だけが、あだ名を一言も発していなかった。

おばさんは、空のままのゴミ箱を戻して部屋を出て行った。

(花か)

どんな種類なのか、今度、渚に聞いてみようと思った。花言葉も知っているのだろうか。

(馬鹿だな)

もうすぐ死ぬというのに、花のことを気にする自分がおかしかった。

(ん)

人の気配を感じた。

(誰かいる?)

おばさんは出て行ったばかりだった。戻ってきた様子はない。

(渚?)

彼女なら必ず挨拶をする。

誰かが、じっと見ている気がした。

(まさか)

太田が現れたのか。あれからも、たまにやってきては、下半身に触れたりする。我慢がならなかったが、彼には抵抗ができなかった。

「壊れかけた文字盤」

静かな呟きが聞こえた。

「汚れた針」

(誰だ)

初めて聞いた男の声だ。高校生くらいだろうか。

「死にたいのですか」

(なに?)

突き刺さるような視線を感じた。心の中を盗み見られているような感覚がする。

「迷っているのですか」

冷たさが少し緩んだ。

「決めかねている、ようですね」

(おい!)

「また、来ます」

声を聞いたことが気のせいだったかのように、たちどころに気配が消え失せていた。

(なんだ、今のは)

暁は幽霊にでも遭遇した心持ちだった。

第三話

「お疲れさまです」

渚は、休憩室でカップを傾けていた太田医師を見つけた。

「なんだ、君か。ふん、今日は蚊などいないぞ」

鼻を鳴らした太田に会釈した。カップの中身をぶちまけてやりたかったが、心を静めて堪えた。

「先日は申し訳ありませんでした」

「どういった風の吹き回しだ」

しおらしい態度を見て、太田は警戒心を露わにした。

「そんなことおっしゃらないでください。あの時は、私がおかしかったのです。虫が嫌いなものなので」

渚はすり寄り、太田の手に触れた。

「お詫びに、今度、ディナーでもいかがですか？ 甘いスイーツもご用意しますわ」

笑い出したくなるような媚びを売った。自分に対しても、反吐が出るということを知った。

「結構だ」

強く振り払われた。カップの中身が渚の顔にかかった。

「熱いですよ、先生」

舌で舐め取った。

苦い、味。

「先生のも、熱くて、苦いのかな」

渚の細い手が、太田の太股に伸びた。

「気色の悪いことはやめろ！」

太田は、ヒステリックにカップを置いた。

「いいか、私は君のような媚びた女が大嫌いなんだ。それ以上、僕に近づくな。そうすれば、今回のことは許してやる」
それだけ言つと、背を向けて去った。

「真性の同性愛者なのね」

渚は、太田の性行に怖気を震った。わざわざ太田の心の声を読み取ったのは、暁への行為が気の迷いなのか、そうでないのか確かめる必要があったからだ。本当は、触れることさえ疎ましい。

案の定、太田は暁を気に入っているようだった。そして、渚のことは、心底嫌っていた。お互い様だ。

暁の身が心配だった。襲われた時の勤務表を調べたところ、太田が宿直医になっていた。次に太田が当番になるのは来週の水曜日だ。頻繁に事を起こすとは思えなかったが、危険が去ったわけではない。

「説得……は無理よね」

暁に対する行為をやめるように頼んでも、聞き入れるわけがない。とぼけて無視され、嫌みを言われるのが目に見えた。

告発するのはどうか。付着していた体液を証拠とすれば、あるいは検査が可能かもしれない。

「捨てちゃったか」

あまりにも気持ちが悪くて、ゴミに出してしまった。今となってはもう見つけれられない。

「やっぱり、あの方法しかない」

どうしても乗り気になれない手があった。それ以外の方法をずっと考えていたが、何も浮かんでこない。誰かに相談することも、時間もない。

渚は、重たい足を引きずって、ナースステーションに向かった。

「それ、本当なの？」

「噂を聞いただけだから、なんとも、なんだけど」

渚は語尾を小さくして、自信のない素振りをする。

「何、どうしたの」

「太田先生がね」

同僚が同僚に耳打ちするのを見て、渚は暗い気持ちになった。噂を広めるというのは、いかにも消極的で、釈然としなかった。だが、

暁のことを考えれば、これも仕方がないと言い聞かせる。

「ゲイって、マジで！」

「声が大きいつて」

声を落としても、女性の高い声は嫌でも耳に入った。彼女たちの会話が、順調に広まっていく気配を感じる。

「前の病院で、患者さんが襲われたらしいの。薬を盛られて、それで……」

同性愛が悪いわけではない。犯罪を犯した太田が悪いのだ。渚は、さじ加減を誤らないように、話の方向を調整した。

「うわあ」

「やだあ」

嫌な顔をしながらも、心の中はもやもやと想像しているのだろう。色艶の話は、彼女らの甘いオヤツだ。

「ねえ、やばいんじゃない？」

「何が？」

気づいてくれた。

「一条くん、寝たきりで意識がないから」

最後まで言わずなというように、彼女は渚に目配せした。

「ちよつと待つてよ。暁を犠牲者にしないで」

もう犠牲者だけだ。

暗くなる心とは裏腹に、渚は少しだけ笑った。冗談と受け取ったように見せかける。

「暁だつて！ もう、渚が襲つてんじゃないの？」

「恋のライバルね」

彼女らの妄想は止まらない。

「やめて！」

ちよつと声を大きくして、ナースステーションを飛び出た。怒ったように思っただろう。同僚を振り切つて、トイレの個室に駆け込んだ。噂はうまく流せた。これで一人歩きしてくれるだろう。

「あれ？」

ほっとして、涙が込み上げてきた。あとからあとから、零れてきた。ハンカチが見つけれられず、服の袖で顔を押さえる。

「どうして」

感情がうまく抑えられない。いつもは、すぐに冷静になれるのに、何故か今日は難しかった。

涙が止まらない。鼻水も出てくる。顔の筋肉が引きつって、なかなか戻らなかった。

「おかしいな」

むせんでくる声は、無理矢理に押し殺した。

暁の部屋に飾っていたシャクヤクの花はしおれていた。渚は、一輪挿しの代わりに、朝顔の鉢を持ってきた。

鉢植えは、根付くという意味で、病院では嫌われている。それでも花言葉の「固い約束」という意味を込めて、飾りたいと思った。

約束は、暁と渚の間にある。

植物状態の暁は、ずっと暗闇の中で苦しんできた。その彼を、太田はさらに傷つけた。自分の欲望のために、抵抗できない彼を性の対象とした。尊厳を踏みにじられた彼は、死を望んだ。

本当は、死ぬなんて言っただけで欲しくなかった。医療に携わる人間にしてみれば、もつとも悲しい選択だからだ。

渚は、太田を病院にいられなくしようと、悪い噂を流した。すべての元凶がいなくなれば、暁の気持ち収まるかもしれない。死ぬと言ったことを撤回してくれることを願う。

渚は、彼のためならば、どんなことでもやる気だった。だが、強いストレスを感じずにはいらなかった。

「ふっ」

このところ、いつも喉が渴いていた。緊張感が続いているからだろうか。

収納棚のところに、お茶の入った紙コップがあった。暁の飲みかけのようだ。渚は一息に飲み干した。ぬるい麦茶だった。

ほっと吐息を吐いて、暁の顔色を窺った。あいかわらず肌の色は白かった。腕の筋肉も落ちて、渚よりも細いくらいだ。女の子みただと思つてから、少し気分が悪くなった。

暁がこんな見た目だから、太田に襲われたのかもしれない。男らしく筋肉がついていれば、狙われなかった可能性もある。

「筋トレって、できるのかな」

渚は、ゆっくりと彼に触れた。

（お前、何か飲んだか？　すぐに吐け！）

二の腕に手を置いた途端、思考が流れ込んできた。

「なあに」

（誰かが、コップに何か入れていた。そんな音がしたんだ）

コップ。何か。

どういうことがよくわからない。頭がうまく回らなかった。

（いいから、吐き出せ！）

「そんなこと、言われて……も」

目蓋が重く感じた。

「まずい、わ、これ」

油断していたのかもしれない。強い眠気と、身体のだるさ。睡眠導入剤の効果だと、思い至った。

「飲んだね」

太田医師がドアから入ってきた。

意識が徐々に薄れてくる。立っでいられなくなった。

「本当に飲むとはね。彼の飲みかけだと思つたのか？　患者が紙コップで飲むわけないだろう。普通は水差した。洞察力が足りないね、君は」

床に座り込んだ渚に向かって、太田は足を振り下ろした。

痛みをどこか遠いところで感じた。

「変な噂を流したのは、お前だろ。いいや、お前しかいない。ずいぶんと彼にご執心のようだからな」

「あんたも……」

かすれた声が、舌を乗り越えられずに消えた。

「女は気持ち悪いが、我慢するか」

太田は首から何かを提げていた。

渚はぼんやりとする頭で、寝台に手を伸ばした。

暁を守らなければならぬ。太田が何をするかわからない。せめて

ナースコールを押せば。

辺りが暗くなってきた。

渚は唇を噛んだ。眠気は強い。振り払えそうになかった。

暗闇に落ちていく。

身体感覚が鈍くなっていく。

何かに包まれていた。薄い幕がいくつもまとわりついていた。自分と、自分の外との間に、幾重ものやわらかい殻が形作られていった。押しても、その分だけ向こうに膨らみ、破れない困いがある。

暁のいる世界は、これと同じなのかもしれない、ふと思った。

まるで、監獄だ。

最終話

渚は頭を抱えて起きあがった。

だるい。何があったのか、思い出せなかった。

「あれ」

下着の位置が不自然だった。位置を直して、暁の姿を探した。彼はいつもと同じように横たわっていた。

何を心配していたのだろう。

記憶が混乱していた。

「何かあったつけ？」

暁に聞こうとしたとき、病室のドアが開いた。

「渚、やっぱりここだった」

同僚に腕をつかまれた。

「何？」

「あなたの写真が」

「早見さん、院長室に来てください」

婦長の厳しい顔もあった。

「はい」

写真という単語に引っかけりを感じた。

「困るんだよ」

院長から渡されたプリント写真に、渚は言葉を失った。

渚のナースウェアがめくられ、下着が下ろされていた。剥き出しになった下半身と、はだけた胸がしっかりと収められていた。暁の股間に顔を埋めたものもあった。

「こんなものが外に漏れでもしたら、病院の名に傷がつくとわかっているのかね？ 誰が撮ったかわからんが」

だんだん頭がはつきりしてきた。

睡眠導入剤だ。おそらくトリアゾラムだろう。あれのせいで、一過

性の健忘状態に陥っていたようだ。通常使用よりも、多く処方された疑いがある。

太田が紙コップのお茶に溶かしていた。医師として、適正な量を知らないわけがない。わかっているながら、多めに入れたのだ。悪意を感じずにはいられなかった。

撮影は、渚が眠っている間にされていた。太田が首から提げていたのは、カメラだった。

薬の効き目から換算して、二時間ほど前になる。その後、院長室にでも写真が投げ込まれたのだろう。

「しばらく君には謹慎してもらおうよ。日頃、よくやってくれているから、悪いようにするつもりはないが」

ねっとりとした老人の眼差しが、渚の胸や腰に絡みついていた。

「申し訳ありませんでした」

婦長が頭を下げ、渚も従った。

「あの」

「何かね」

「その写真は」

渚は、暁と写った写真を指さした。

「没収だ」

処分してくれるのか。それとも。

震える腕を震える手で握った。冷静になるように努める。

裸の写真など、取るに足りないことだと思いついた。見られて減るものじゃない。身体が傷つけられたわけでもない。

暁のことを思った。

これくらいのこと、何でもないはずだ。

我慢できる。

我慢してみせる。

事を荒立てない、と病院の方針が決まった。

一週間ほどで、渚は病院に復帰した。だが、写真の噂はナースや医

師たちの間で広まっていた。

太田の噂は、いつの間にか消えていた。

渚は、暁の病室に出入り禁止になった。それ以外は、いつもどおりだ。いや、男性医師のアプローチが多くなった。尻の軽い女と思われる。

どうでもいいことだった。

静まり返った廊下に、点滴スタンドの転がる音がした。トイレに起きた患者が、寝ぼけ眼でナースステーションの前を通過した。

軽く頭を下げる中年男に、渚も会釈を返した。さすがに患者は何も知らないようだ。院長の差配は、そこだけはうまくいっていた。外には、確かに漏れていない。

男性が戻ってきたタイミングで、渚は同僚に見回りをしてくることを告げた。

「よろし……く」

渚が入れたお茶を飲んだ彼女は、とろんとした目をしていた。トリアゾラム錠を砕いた粉末を混ぜていた。太田がやった手法と同じだった。

薄暗い廊下に出て、靴を脱いだ。音を立てないように、廊下を早足で移動する。奥まった位置にある一人部屋に入る。寝台に横たわった青年は、廊下の静けさと同じだった。

渚は青年の細い腕に触れた。

（渚！）

あの子のことは、だいたい察しがついているのだろう。誰かが彼の部屋で話をしたのかもしれない。

「暁、会いたかった」

今までは、毎日のように顔を見せていた。たった一週間、離れていただけで、胸が締め付けられる思いを感じた。彼のことが好きなのだ、今更ながらわかった気がする。

（大丈夫か？）

「ええ」

患者から心配されるようでは、看護師としては失格だ。女としては、嬉しくて仕方がない。

「失敗しちゃった」

太田が同性愛者という噂を流したことは、暁には内緒だった。だから、何が失敗なのか、彼は知らない。

（仕事のこと？）

「うん」

（誰にでも失敗はあるよ）

慰めの言葉に心が震えた。その失敗で、暁が望んだ死を食い止められなかった。渚には重たすぎる痛手だった。

（お前の手つて、あたたかいよな）

動かない唇が、動いた気がした。耳に聞こえていると錯覚した。彼の声を耳で聞いたことはない。どんな声をしていたのだろう。一度でいい、聞いてみたいと思った。

「ありがとう。暁もあつたかいよ」

鉢の朝顔は萎れていた。だが、まだ生きていた。

「約束を果たさないかね」

暁を殺す。そして、苦しみから解き放つ。それが、二人の約束だ。

（ああ、気は変わってない）

渚がいない間、太田が再び体位を変えに来た。水曜日のことだ。暁は、口に出すのも汚らわしい行為を受けた。抗う術はなかった。牢に繋がれた虜囚には、逃げ場がない。

性虐待のことを、渚には伝えない。もうこれ以上、辱められることもなくなるのだ。

「わかった。準備するね」

渚は、点滴スタンドを寄せた。そこに生理食塩水のパッケージを下げる。

「少し痛むよ」

アルコールで腕を拭き、注射針を刺した。管と点滴のパックが繋がった。

(これで、終わる)

長かった暗闇の生活は、苦しみに満ちていた。

暁は、遠く隔たった分岐の先を夢想した。

植物状態にならなかつたら、今頃、大学に通っていたかもしれない。社会人になつていたかもしれない。いろいろな世界を見て、楽しく過ごしていたはずだ。

だが、渚と出会うこともなかつただろう。

現実には、白い壁に囲まれて、彼女と触れ合えた。

「もうすぐ、終わるよ」

渚は注射器を取りだした。点滴の容器に注入すれば、あとは永遠の眠りが待っている。

(待つて)

これで自分は死ぬことができる。だが、渚はどうなる。調査が行われれば、渚が彼を殺した犯人だとすぐにわかるだろう。

「安楽死させたことが、問題になると思っっている？ 気にしないでいいのよ」

渚は、暁の頬に、頬を寄せた。髭がちくりとした。

「いつだったか、言わなかつた？ ずっと一緒にいてあげるって」

(え?)

「鈍いわね」

渚は二つ目の点滴を用意した。自分の腕にも針を刺し、準備を整えた。透明な管が螺旋状に絡まり、二人の身体に繋がれる。

「私も一緒に死ぬんだから」

患者を見守る看護師としてではなく、一人の人間として、彼と寄り添った。

(渚)

心の底で、暁は思い描いていた。彼女が来てくれることを願っていた。そうすれば、死んだ後も、いや、死ぬことで、一緒にいられると。二人の世界が重なりあうのだと。

暗い喜びが、彼の心に染みだしてきた。渚も同じだった。

二人の世界にノック音が割り込んだ。

「誰」

渚が青ざめた顔でドアを見つめた。太田の顔がよぎった。

「くんばんは」

（この声）

暁には、聞き覚えがある声だった。二度目になる。

「君は……柏木くん？」

渚には、見覚えがあつた。去年の秋まで、入院していた女性を毎日のように見舞っていた高校生だ。彼女の最期は、彼だけが看取った。

「お久しぶりです。早見さん」

柏木秀樹は、友人の見舞いに初めて訪れたかのように、遠慮がちに会釈した。

（彼を知っているの？）

「ええ」

（何者なんだ。俺が死にたいって思ったことを、知っているようだったぞ）

「まさか」

誰にも話した記憶はない。暁との世は、誰にも干渉されなくなかった。

秀樹は、横たわつた青年に目を向けた。

「ひびの入つた文字盤。汚れて曲がつた針」

（どういう意味だ）

「何なの、それ？」

「……外れかけた鎖」

秀樹は、渚の胸元を指し示した。

「外れかけ……？」

渚は胸のポケットに挟んでいたナースウォッチを見た。クリップ付きの懐中時計だ。患者を傷つけないようにするため、看護師は腕時計を着けない。渚は、代わりにナースウォッチを身につけていた。

「取れてないわよ」

しっかりとポケットに収まっていた。

「針が止まりそうです」

時計の針は、時間を刻む。

時間が止まれば、世界は終わる。

人の持つ時計は、命を計る。

秀樹には、渚と暁の時が見えていた。生きている人間の顔に時計は浮かび、時を刻む。針が動かなくなれば、死だ。針の遅れは、生の嫌悪、死の渴望だった。

「二人とも、死ぬんですね」

平凡な顔の高校生が、薄暗がりの中で、なお暗い眼の光を放っていた。鋭いわけではない。ただ暗い眼が、吸い込まれそうなほどに黒く浮かび上がっていた。

「そう、私たち、死ぬの。だから、邪魔しないで」

渚は顔を背けた。指の先が冷たくなっていた。暁に触れた手は、じつとりと汗が滲んでいた。

「邪魔はしません。ただ、忠告します」

「忠告？」

「早見さんは、この人を好きですか？ 離れたくないですか？ もしそうなら、殺してはいけません」

「生きる、とでも言うつもり」

それがどれだけ辛いことか、何も知らない人間に口を出してほしくはなかった。

「人を殺して、自分も殺してしまったら、早見さんは地獄に堕ちるかもしれません。この人と別れることになってしまいます。死んだ後に、離ればなれです」

（何だって？）

「なんで、君にそんなことがわかるの」

暗い眼差しを見ていると、何故だか、彼ならわかっていそうな気がした。

「わかりません」

拍子抜けした。

「僕はまだ生きていますから、死後のことは、死んだ人に聞かないと、はつきりわかりません」

秀樹は目を泳がせた。彼が看取った女性の魂魄こんぱくを探しているかのようだった。

「ですので、あとで教えてくれませんか。命が消えたらどうなるのか、殺された人間はどうなるのか」

「教えられたらね」

渚は思わず口走っていた。できるかどうかはわからないが、何かをしてあげたい気持ちがあった。

秀樹に、どこか危うさを感じる。患者に対するような、弱った人間を守ってあげたくなるような感情だ。クマのぬいぐるみを抱えた女の子を思い出した。

「ありがとうございます。お礼というわけではないのですが、お二人は僕が殺します」

あっという間の出来事だった。

秀樹は、渚の肩をつかむと、その唇に口づけをした。彼女は急に力を失い、死神の腕の中に頼れた。

暁の隣りに、渚を寝かせる。

暁にも唇を寄せた。彼の呼吸も霞と消えた。

秀樹は、目眩を覚えた。膝について、浅い呼吸を繰り返す。彼らの記憶が、どっと押し寄せて来る。

いくら呼びかけても、誰も応えてくれない苛立ちがあった。初めて声に気づいてくれた時の喜びはひとしおだった。辱められた悔しさは言葉にならない。同情には怒りだ。

弱った人たちへの慈しみは尽きなかった。元気になって家に帰っていく患者には、誇りを感じた。目の前で失われる命の喪失感はない。果てがない。未熟な自分に対するやるせなさを、心を殺してしのいだ。

そして、誰かがそばにいる安堵を分かち合った。

ひとひらの記憶、ひとひらの感情が、秀樹の心の隙間に刻み込まれ

ていった。

泣きながら怒り、苦しみながら喜びを感じた。

しばらくの間、彼は微動だにできなかった。心の乱れが収まるまで、静けさに身を任せた。

「生かされることは、つらいですね」

暁の苦しみが、心を削った。

「見守るしかできないことは、つらいですね」

渚の無力感が、心に気泡を作った。看護する者の気持ちは、秀樹にもよくわかった。

「つらいことは、忘れてください」

二人の手を重ね合わせた。

「おやすみなさい」

彼らはいつも触れあって、語り合っていた。今はもう、手が重ならなくても、心が重なっているだろう。

秀樹は、耳をそばだてた。

「聞こえない、か」

渚の声も、暁の声も、聞こえなかった。

「わからなかったのか。僕の耳に聞こえなかっただけなのか」

秀樹は暗がりの中で黙祷してから、病室を後にした。

朝顔が少しだけ花弁を開いていた。

最終話（後書き）

最後までお読みいただき、ありがとうございます。

本作はGrim Reaperシリーズ、初の長編でした。

説明不足の感は否めなかつと思いますが、

cryとあわせれば、多少は読めるようになるかもしれません。

お時間がある方は、よろしく願います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2125v/>

Grim Reaper - prison

2011年8月22日12時40分発行